

203. 将棋史研究ノート(2)

—将棋について思う事—

7. 王将の登場について

それでは王将はいつから登場したのであろうか。今、手元にある遺跡出土の将棋駒には、鎌倉時代初期の建仁3(1203)年銘の木簡と供伴した、京都市伏見区中島掘端町の鳥羽離宮跡第135次調査の王将が最古である。玉将の最古のものは、鎌倉時代末期(1323年頃)の韓国新安沖海底船遺物に出土例がある。遺跡出土の駒によるならば、王将もかなり早い時期に登場している事がわかる。という事は、既に平安時代には王将も玉将も存在していたと考えて良いと思われる。この違いは何を意味するものなのであろうか。

増川宏一氏の「将棋」(1977年)によれば、文安3(1446)年撰の『壻囊鈔』には、「両王イマサン事ヲ忌テ、必ズ一方ヲ玉と書ク」とされているが、実際には紛らわしいので区別をしたとされている。また、奥山紅樹氏は「玉、金、銀、肉桂、沈香という五宝概念に、まったく異質な将、馬、車、兵と言う軍事概念を結合させた世界でもただ一つの二重名を持つものである」と述べておられる^⑧。命名の正確な理由はわからないが、歩兵の歩の字を除いて美称であることは間違いない。唯言える事は、将棋の駒で玉将のみ敵に取られる事がない為、敵味方の区別をつけて置く必要があったのではないだろう^⑨。

韓国将棋で象の駒は用の字に動くと言われるように、複雑な駒の動きを文字に変えて覚え易くした言葉がある。そして、室町時代の駒に記されているように、駒の表面には文字とその駒の動きを線や点で書かれているものがある。駒の動きを記したものは、鎌倉時代以前には発見されていない。動きを記した駒は、いわゆる将棋の初心者にも分かるように配慮されていたものであろう^⑩。ここで、将棋が日本に伝えられた頃の事を考えて見ると、駒の動きは何らかの形で記して分かるようにした可能性がある。その駒が出土していないと言う事は、その駒が存在していないと仮定すれば、5～6種類の駒の動きならばすぐに覚える事が可能であったと言う事実を示している。また立像形であれば駒

の名称と動きの両方を覚えなければならないが、平面形(即ち円形もしくは八角形)であれば書かれた文字によって駒の名称は理解される。そこで、前述の増川氏の説がびたりとはまってくる。それを将棋が博打として広まっていったという事実が後押ししている。

玉将の玉の字は偏にも使用されており、現在では「王」と書いて「たまへん」と読むことになっている。これは玉の点を省略した形であるといわれる。この辺りも王将の登場に関わる手がかりにならないだろうか。

8. 持ち駒の使用について

次に持ち駒の使用であるが、将棋が日本に伝わった当初は駒は取り捨てであった^⑪。持ち駒使用は日本の将棋のみに現れたルールである。では、両者の違いは如何なる所にあるのであろうか。

まず、持ち駒の使用が可能であれば、競技自体が複雑になると言うことである。それまでは、自分の駒をいかにして取られずに相手の駒をたくさん取るかと言

車	車	鉄	鉄	銀	銀	王	銀	鉄	鉄	車	車
香	龍	桂	馬	虎	行	横	虎	馬	龍	香	香
車	車	飛	飛	猛	猛	猛	猛	猛	飛	車	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
					注						
						注					
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
奔	飛			猛	横		猛		飛	奔	奔
車	龍			虎	行		虎		龍	車	車
香	桂	鉄	銅	銀	金	玉	銀	銅	桂	香	香
車	馬	將	將	將	將	將	將	將	馬	車	車

平安大將棋(注②より)

うことに、ゲームの興味が集中していた事であろう。そのようなゲームの進められ方は、駒数に限りがあり、駒の動きに制限がある小将棋（平安将棋）ではなかなか戦いが起こらない事が予想される。将棋が博打として行われている間もそれは問題になっていたと思われるが、純粹にゲームとして競技されるようになると、駒自体の能力が低いこともあってさらに面白味に欠けるものとなった。即ち、平安将棋の駒の能力では勝負になりにくいと考えられる。

平安時代の終わり頃に同時に存在していた大将棋では駒の数が二倍前後と多いため、駒の取り捨てるルールで差し支えなかったものと思われるが、小将棋の駒数（32枚）では大きく動く存在しない限りすぐに手詰まりになってしまう⁹⁾。

9. 飛車・角行の登場について

ここで、もう一つの問題である飛車・角行の出現の問題が浮かび上がってくる。飛車・角行のようないわば飛び道具的な能力を持った駒が現れない限り、勝負としての将棋の魅力は半減するものと思われる。これは博打として行われていようが、遊戯として行われていようが、同様であったと思われる。

飛車・角行は鎌倉時代頃に登場したと言われている¹⁰⁾。それまでの駒では平安大将棋の奔車と横行の駒を合わせると飛車と同じ動きを、また飛龍の駒は一枚で角行の動きをする駒であった。

遺跡からの出土例では、長野県上田市の塩田城跡で14世紀～16世紀の角行が1点出土している。また、「花管三代記」の応永31（1424）年正月二日には中将棋が遊ばれていたと言う記録がある¹¹⁾。恐らく、この時期以前に遊ばれていたものと思われる。塩田城跡の角行は同時に盲虎の駒が出土している事から、中将棋の可能性が高いが、少なくともこの時期には角行は存在していた事だけは確かである。

また、中将棋について言えば、神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮から鎌倉時代末期頃とされる鳳凰の駒が見つかっている。京都市伏見区の鳥羽離宮跡第59次調査でも同時期の金将の駒が出土している。この金将は、裏に「飛」と読める文字が書かれてある事より、中将棋の駒である事が分かる。即ち、鎌倉時代の少なくとも終わり頃には中将棋が遊ばれていた事になる。角行の駒の出現時期は、遅くとも14世紀の初め頃をもって行けるであろう。また、中将棋が登場していれば当たり前の事であるが、同様に飛車の駒も前記の金将の裏に書かれた「飛」の文字から、鎌倉時代の終わり頃には登場していたとかがえられる。

この様に鎌倉時代の終わり頃より以前に登場した飛車・角行を取り込んだ小将棋は、室町時代の終わり頃

角	頭	角	角	頭	角	角	頭	角	小象戯 凡小象戯者象 方之士卒而以方便 馬戯也 長才又守三方 厚寸二方 及寸三方 及寸三方 不雜駒而為全捕加味 三將開耳及生捕之
	銀將		腹	金將	背	腹	玉將	背	
將		將		將		將	將	將	
							越	越	
	歩兵			香車	頭				
と	歩		龍		金	桂馬			
	歩兵								
	魚行			醉象			飛車		
香車	桂馬	銀將	金將	玉將	銀將	桂馬	香車		

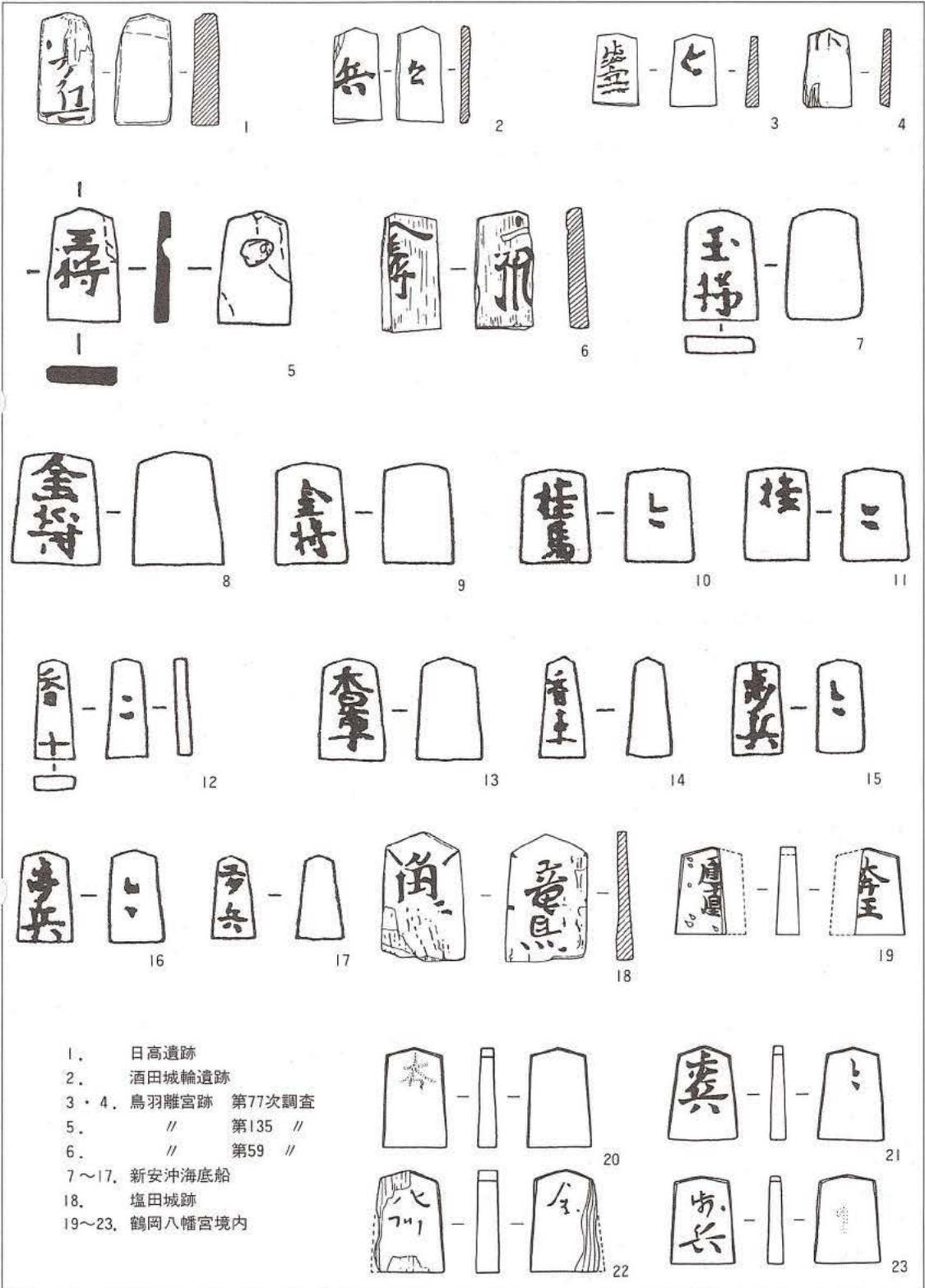
駒数42枚の将棋(注②より)

(天文～永録)には既に醉象の駒を加えた42枚の駒を持つ小将棋を作り出していた¹²⁾。その小将棋の始まりは定かでないが、京都市南区の上久世城内遺跡から1350年前後とされる醉象の駒が出土している。この駒は、中将駒の中にもある駒ではあるが、14世紀の中頃には上記の小将棋が登場していた可能性もあるのではないと言える。

10. まとめに代えて

将棋は奥の深いゲームである。戦後に開発された、たて歩取り戦法を除くあらゆる戦法は、江戸時代初期に既に使用されていたと言われる¹³⁾。当時の花形戦法であった振り飛車は、戦後の昭和30年代になって、大山康晴と升田幸三と言う二大スターの出現によって再び脚光を浴びる事になった。将棋の戦法を定型化したものを定跡と呼ぶが、定跡はいつ如何なる時でもそれで終わりではない。数多くのプロ棋士が何年もかけて定型化した戦法を、後の時代のプロ棋士達がまた何年もかけて覆していくと言う繰り返しを続けながら、定跡は無限の螺旋階段を登って行くように発展していくのである。

現在その発展法則は、周期を縮めつつ繰り返されているようである。しかし、今まで何千何万人と言うプロ棋士達が将棋を指してきたその棋譜は、唯の一つとして同じものが現われた事はない。それは、持ち駒を再使用できるというルールのなせる技なのである。即ち、取った駒を再び使用する無限性と飛車・角行などの適度な飛び道具を交えつつ、攻防に駒がバランス良く配備されている、将棋という極度に完成された盤上遊戯ならではの現象である。



各地から出土した将棋駒 (S=1/2)

このように完成された将棋の歴史を辿る事は、一つの遊戯を通してその社会のあり方を垣間みる事に他ならないと言える。古代に伝えられた将棋は、中世に於いて日本独特の発展を遂げた。最初は博打道具であったものが、識字層に広まりながらその底辺を広げ、やがて権力者の庇護を受けるまでに成長し、一つの文化として現在に至るまでその存在を強めていったのである。

博打の道具として伝えられたものが、一つの文化にまで発展してきた将棋の無限の可能性に賛辞を贈りつつ、この筆を置く。 (三宅 弘)

注

- ① 出土駒の一覧と個別の詳細については、別稿を予定している。
- ② 以下、将棋の発生と伝播については、増川宏一(『将棋』ものと人間の文化史23、法政大学出版局、1977年)を参考にした。
- ③ 前者は、中国漢代の墓から瓦製の三人将棋盤が出土している事から、少なくともこの時代には遊ばれていたとする考えである。関忠夫編(『日本の美術』32遊戯具、至文堂、1968年)20頁。
後者は、中国に8世紀のものが散見される事から、少なくとも7世紀には伝えられていたとする考えで、木村義徳氏はそれよりさらに1~2世紀遡っていいと考えておられる。注②の53頁及び、木村義徳「持ち駒使用のはじまり」一将棋は十三世紀に成立(『遊戯史研究』2、遊戯史学会、1990年)21~22頁。
- ④ ここでの比較は、駒を盤に置いたときの位置の比較であり、駒の性能の比較ではない。
- ⑤ 第十九「二中歴」(『改訂史籍集覧』第二十三冊、近藤活版所、1901年)
- ⑥ 水野和雄「将棋の流行」(河原純之編『古代史復元』10、古代から中世へ、講談社、1990年)181頁。
- ⑦ 注2、142頁~147頁。他に水野氏もその様に考えておられる。
- ⑧ 大内延介(『将棋の来た道』タイ編1・2、めこん、1986年)には、インドから日本への伝来の経路地として、駒の動き、盤の利用スペースなどからタイを考えておられる。
- ⑨ 注②参照。
- ⑩ 中国での8×8の立像形駒から9×10の円形駒への変化の中間形態として、8×8の円形駒の時期があってもいいように思われる。
- ⑪ 将棋盤の出土がまだ確認されていないので、明確な事は言えないが、伝来当初はあまり盤は使われず、紙や地面に線を引いて盤の代わりとしていたの

であろう。九九の流行が平安時代であるならば、9×9に変化したのも平安時代の間と考えていいと思われる。

- ⑫ 正倉院御物や『延喜式』僧尼令、『倭名類聚抄』などに碁の存在はあっても将棋の存在は一切残されていない。これは、何らかの形で記録されなかったのではなく、当時の識字層(記録を残す事が出来る階層)に将棋というものがまだ伝えられていなかったのではないかと考えられる。
- ⑬ 「麒麟抄」(『純群書類従』第31集下、群書類従完成会、1926年)
- ⑭ 注⑤参照。
- ⑮ 将棋の伝播経路として中国・朝鮮半島を重視するならば、横8柁・縦9柁の将棋盤を考えてもいいように思われる。
- ⑯ 奥山紅樹「桂香の由来と五宝の概念について」(『将棋世界』第43巻第3号 1979年)
- ⑰ 注②参照。
- ⑱ 表面に朱点などで動きを記してある駒は、水野氏によれば中将棋などの駒である可能性が高いとされる。
- ⑲ 注⑤によれば、敵の玉一将だけになると勝ちになる事が記されている。
- ⑳ 持ち駒使用の始まりに関しては、敵見方の駒が同じものであることが前提となる。
- ㉑ 注②木村論文参照。
- ㉒ 注②参照。
- ㉓ 注④によれば、後奈良天皇の命によって酔象の駒を省いた事が、事実として確認されたと書かれている。
- ㉔ 天狗太郎(『将棋の民俗学』作品社、1992年)

参考文献

- ① 小泉信吾「出土駒からみた将棋の発生」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年)
- ② 小泉信吾「駒の出土例とその意義」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集一創立五周年記念誌一、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年)